

---

# オレンジ

赤井慎一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレンジ

### 【Nコード】

N6028A

### 【作者名】

赤井慎一

### 【あらすじ】

正義感が強く、好奇心旺盛な主人公、18歳のライフ・エルジオン。彼には守るべきものがあつた。それはたった一人の『家族』である妹、シュウ・エルジオン。妹を守るため、そして人類を守るための選択を迫られたライフに真の幸せは訪れるのか。本編をお楽しみに。

## 1. プロローグ

波の音は静寂を掻き消す。海岸は穏やかで、自分達を除けば人の子一人いない。

辛いとか悲しいとか死にたいとか。そんな想いをここに捨てて行く人って、やっぱり弱いんだよな。自分一人じゃ整理出来ないからここに捨てて行くんだよ。この海、陸、空はその全てを受け入れられる。寛大で大らかで、とにかくすげえでかくて：おれも甘えたいかなるような場所だよ。

この世界に日を運んでいる遠い遠い光と熱の塊が、海に向こうから最期の夕日を視界一面に放っている。

「またあの太陽が昇る頃には、おれたち死んでるんだろ？」

隣にいる男からの答えはなかった。その沈黙こそ答えだから。

「こんな綺麗なもの、最期に見れるなんて。幸せな方だと思うぜ。」

一日は当然のように過ぎていく。それに伴って、明日は必ずやってくる。

誰かが言っていたっけ。あの遠い熱の塊である球体には寿命があるんだって。五十億年もすれば、あの球体は熱と光を失ってしまうんだって。だからこんな綺麗な夕焼けなんて、見られるのはあと五十億年だけらしいんだ。気が遠くなるような話だけど、でもその中の一回一回って凄く大事なんだなって、今は思うんだ。だってこれが最期だから。あの球体はまだ熱も光も失わないけど、これが最期なんだ。

「まだいるのか？」

「もう少しだけ。」

隣の男はそれだけ聞くと、静かな足音を残し、去っていった。

「目に焼き付けておきたいんだ。最期のオレンジ色の夕日を。」

## 2. 運命。逆らうべからず（前書き）

本編の主人公、ライフアのような人、最近減ってきてるような…。だからこそこういう設定にしてみたわけです。これを読んで増えて欲しいですね。こういう熱い人。

## 2. 運命。逆らうべからず

満員電車の中、ある男と出会ったんだ。本当に小さな出来事だったから、気にも止めてなかった。運命って言うのかなあ。あの場で出会わなくてもいずれどこかで出会った気がするんだ。

そう、朝起きて、学校に行こうとして、あの電車に乗ったんだよ。そしたら…

「てめえ！もう一回言ってみやがれ！」

満員の電車で運よく座席を確保して、うとうとしていた時、その怒声は聞こえてきた。はっと目を覚まし、辺りを見渡す。だが座っているため、視界には前で立って新聞を読んでいるサラリーマンを中心に、怒声が気になって振り返る女学生、キョロキョロと辺りを探し回っている乗客しか映らない。

「もう一度言おう。君らがもつと詰めればその座席シートにあと二、三人は座れるのだ。そんなでかい態度で公共の場を占拠するなんて言っている。」

どうやら怒声を浴びた張本人の発言のようだ。

一体どこで争っているのか全くわからなかったが、その人が発言してくれたおかげで居場所がはっきりと割れた。なんと自分が座っている座席の向かい側ではないか。周りの乗客も後ろを振り返っている。

「ここはな、俺らが先に座ってたんだから俺らに座る権利があるんだよ。てめえが座りてえからってガタガタ文句ぬかすんじゃないやねえよ！」

ドカッという鈍い音と共に、辺りから悲鳴にも似た歓声が上がった。

これは大事だな。

自分の中にある正義感が燃えたぎってきた。重い腰を上げ、出来事に夢中になっている乗客の間を無理やり通り抜けて行く。

前にもこんなことがあった。こういう他人事のトラブルの時、迷わず助けに行けるお前って凄いよ、って友達に言われたことがある。その言葉は今でも胸に深く刻まれており、こんな場面でこそ自分が輝ける時だと実感していた。

最前列に出てみると、いかにもって感じのチンピラが三人、目に飛び込んできた。横を振り向くと、勇気ある被害者らしき人が周りの乗客に支えられながらこちらを見ていた。殴られた反動で後退してしまったのだろう。

「なんだ、てめえ？」

チンピラの一人がこちらに睨みを効かせながら言った。全員ピアスに全員ダボダボファッション。改めて見ると本当にいかにもって感じだ。

「おれはライフ・エルジオン。以後よろしく。」

ライフアは躊躇することなく名乗った。チンピラ三人はぼかんとしている。

「てめえの名前なんかどうだっていいんだよ！」

一人が殴りかかってきた。

ライフアはその拳をさらりと交わし、伸びきった腕を右手で掴むと、そのまま関節とは逆に捻ってやった。

ぐああっとチンピラは叫び、その場に伏した。

すると残りの二人もわけのわからない文句を叫びながら殴りかかってきた。

ライフアは慌てることなくその二つの拳の軌道を見破り、しゃがみ込むように交わした。

後は左手で右側のチンピラの首を手刀で突いた。

完璧に気絶するポイントを押さえているのであと小一時間は起きないだろう。さらに、また左手で左側のチンピラの胸ぐらを掴み、頭突きをお見舞いしてやった。チンピラは、ああっと叫び声を上げながら額を抑えて倒れた。伏しているチンピラも、もう勝機はないことがわかったようで、抵抗する様子さえ見せていない。一瞬の静寂の後、一気に周りから歓声と拍手が湧き上がった。

これだ、これだよ。今がおれの一番輝ける時なんだ！

ライフアは照れながらも嬉しさを隠しきれず、笑顔で周りに頭を下げている。

するとそこへ、殴られた被害者のおじさんが近寄ってきた。

「いやあ助かったよ。ありがとう。」

そうやってきたこのおじさんは三十代後半から四十代前半のスーツを身に纏ったサラリーマン風の男性。とてもさつきチンピラに言っていた台詞とは結びつかないくらいいい人そうな人相だ。

「いえ。こういうの見て見ぬふりできない性格っスから。」



ライフアの言葉ににこりと満面の笑顔を浮かべたその男性は振り返って消えて行ってしまった。

未だ鳴り続く歓声の中、ライフアはこれが全ての始まりだとは思ってもいなかった。

朝の満員電車は賑やかになり、到着地点まで静けさを取り戻すことはなかった。嵐の前の静けさの、その前にある幸福のように。

### 3. 闇

闇には何かがあるような気がする。例え何もなかったとしても、架空の存在を造り上げてしまうのだ。だがここの闇には確かに何かが存在していた。

真っ暗な部屋で回転式の背もたれがある椅子に腰掛けた一人の男は、静かに時の経過を見つめていた。昼間だというのに何故こんなにも暗いのか。

男が部屋に入室してからしばらくして電話の呼び出し音が鳴った。男はポケットから携帯電話を取り出した。

「おれだ。うまくいったのか？」

電話に出るなり男は先を促した。

「ええ。あなたの要求通りに。」

「そうか。後は…誘拐だけだな？」

「ええ。ですがそちらもすでに手配済みです。」

「なるほど。さすがに仕事が早いな。それでターゲットの力量はどうだ？」

「ええ。申し分ないと思われます。うちの直属の部下をチンピラ役に仕立て上げ、作戦を始動しましたが、あっという間に片付けられました。我が部隊の軟弱さも原因かもしれませんが。」

「それを聞いて安心したよ。君の部隊は我が組織でも優秀とされて

いるのだ。では、引き続き任務の遂行に当たってくれ。イオリ・バティストゥー。」

「了解。」

そこで男は耳から電話を離し、会話を止めた。そして携帯電話を再びポケットにしまうと、立ち上がってその部屋から出ていった。誰もいない部屋には、未だに闇が広がっていた。太陽の光を完全に遮断しているその建物には、昼と夜などなかった。闇は四六時中その建物を覆っていたのだった…。

#### 4. 兄（前書き）

まだまだ物語の角質に近づいている段階ですかね。起承転結の〈起〉にさえ入ってない気が致します。先は長いです。

## 4. 兄

学校は少し早めに終わった。六限からは職員による会議が行われるのが理由らしい。おかげで早く帰れるのだから、生徒達は万々歳だ。おそらく、その会議というのも、くだらない成績向上のための会議ってやつだろう。

おれたちが住むこの《サミテル》という地域には学校が少なく、高校は三校しかない。それだけに生徒数は多いのだが、それと同時に教師も多い。地域内の三校は互いに競争心が強く、いつも競り合っている。それだけに、おれのような問題行動を起こす生徒は目の敵にされる。サミテルで一番になったところでたかが知れている。こんな小さな街なのに。

地域の代表者達はサミテル巨大化都市計画なるものを進めているらしい。隣町と合併し、建設革命を起こす気なのだ。《カントナ》という街が、それで以前とは比べものにならないくらい巨大化した。それを真似てのことだろう。あちこちで建設中のビルや建物があり、住民達にとっては、騒音問題の密集地帯のようだ。

家で妹のシュウ・エルジオンと、その計画について話したことがある。シュウは大反対のようで、シュウもおれも今のサミテルが好きなのだ。緑が多く、数多くの思い出がある。サミテル巨大化都市計画など中止になってしまえばいいと、心の底から思っている。

そんな計画が成功したとしたら、また教師達も目をガラガラさせておれたち生徒に熱い指導を施すだろう。

そんなこんなで、ライフアは今、最悪な気分だった。

朝の一件が学校の教師達の耳に入り、小言をさんざん聞かされた。人を殴るなど何度言わせるんだとか、手を出さずに解決させようとする知恵がおまえにはないのか、とか。

確かに手を出してしまったことは悪いことだと心得ている。けどおれは自分勝手な暴力を振るったわけじゃない。しっかりと理由もある。

った。おれが行かなきゃあのおじさんは大変な目に遭っていたかもしれないんだ。現にあのおじさんは殴られていた。どんなにそのことを教師達に説明しようとも教師達は聞く耳すら持っていなかった。ライフアの通っている学校まで距離はそう遠くない。

それでもライフアが電車で通学しているのは、電車内での犯罪率が高いからだ。

犯罪が起きれば必ず被害者が出る。

その犯罪を未然に防ぐため、ライフアは電車通学をしている。たった二駅分だが、それでもかなりの数の犯罪を取り締まっている。そんな正義感があるのは、きっと父の遺伝だろう。警察官であった父も、正義感の強い人だった。上の人になんと言われようと、自分の中にある正義を貫いていた。それだけに出世の道とは見放されていたが。

駅から家まで歩いているライフアは今亡き両親のことを考えていた。

二年前、交通事故で他界した。

父はおれを、母は妹・シウを守るようにして死んでいたそうだ。それからおれと妹は祖父母の家にお世話になっている。心の優しい祖父母だが、両親の死をひどく悲しんでいて、たまに仏壇の前で二人揃って泣いているのを何度か見かけている。妹のシウはまだ幼いし、自分がしっかり者でないと駄目だという責任も感じている。シウは必ず自分が守る。両親に代わって。

ふと気づくと自宅の前まで来ていた。

決して豪華な家ではないが、それなりにしっかりとした一軒家だった。

門を開け、ポケットの中から鍵を取り出し、鍵穴に差し込む。だが鍵は開いているようだ。きっと祖父が閉め忘れたのだろう。祖父の物忘れの激しさは尋常ではなかった。この間はタバコを買いに行つて何を買うのか忘れたと家まで戻ってきたほどだ。正確には買い物をするために外出したことをすら忘れていた。

ドアを開け、中に入ってみると、玄関には一つも靴は置いてなかった。

おかしい…。

シュウは学校からも帰ってきているはずだ。今日はテストだから午前中には学校が終わっているということだったはず。友達とどこかへ出かけているのだろうか。気にはなったが、考えても仕方がないと思い、バッグを玄関に放り投げて、少し心当たりのある場所を探してみようとドアを開け、外に出た。まさに扉が閉まったその瞬間だった。

「動くな。」

こめかみに冷たいものを感じた。ぴたつと動きを止め、横目で隣を確認してみる。やはり。自分のこめかみに今、銃が当てられている。次第に鼓動が高まっていった。自分に銃を向けているのは男だ。戦えば勝てる自信がある。だがこの状態ではさすがに身動きがとれない。ライファは手の指先から足の指先まで震えいた。

「これから話すことをよく聞け。一度しか言わない。いいか？」

男の台詞は疑問文であったが、動くなと言われて、首を縦に振ることすらできない。

「ライファ・エルジオン。君の妹は預かった。こちらの要求を聞けば妹は無事に返そう。約束する。だが背けば…わかるだろう。残念だが妹とはもう会えないことになるだろう。」

その言葉を聞いてライファの頭の中で何かが音を上げて弾けた。シュウを誘拐？こいつが？

ライファの中で怒りが形となって表れた。

自分のこめかみに当てられた銃の事なんか頭にない。

拳を強く握り締め、そのまま男の顔面にぶち込んでやった。

すると男は、うっとうめき声を上げ、後ろに倒れた。その隙にライフアは男が銃を握っている左手を思いっきり踏んづけてやった。男はぎゃあと悲鳴を上げ銃から手を離れた。ライフアは倒れている男の胸ぐらを掴み上げたが、その時銃声が響いた。ライフアは動きを止めた。何故銃声が？銃は自分の足元にあるはず。誤射か？

答えは簡単だった。急に自分の体内が異常に痛み出した。腹の辺りだ。手で抑えてみる。そしてそこに視線を運ぶと、見事なまでに血が流れ出していた。

撃ったのは…

痛みに堪え、そつと後ろを振り向くと、そこには両手で一丁の銃を身構えている女がいた。銃の先端からは、煙が出ている。発砲した後だという証拠だ。

腹部からは激痛が走ってきている。ライフアは立ったまま、自分の傷口を懸命に抑えつけていた。心臓が躍動し、呼吸も荒々しくなっていく。視界も段々と薄れてきた。

くそお…。シュウ…。シュウを返せ…。誰か…誰か助けてくれ…。

ライフアの意識はそこで途絶えた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6028a/>

---

オレンジ

2010年10月11日20時10分発行